

第2回 医鍼薬地域連携研究会（仮称）概要

日 時

平成29年12月6日（水） 18:00～20:00

場 所 帝京平成大学 605号教室

名称の確定とその根拠

来年から「かかりつけ薬局」制度が実施されることから、薬剤師が患者の相談にのることで700円/月/人の経費が支払われることになっている。患者中心の医療を目指す本研究会の活動において、薬剤師の力は頼りになると思われる。谷クリニックでの診療形態もそうであるが、社会制度の変化が、薬剤師を活用する方向に進んでいることから医鍼だけでなく、医鍼薬連携とする方がパワフルと考えられる。

医鍼薬連携における課題を中心にしたディスカッション

1) 赤羽先生

●谷美智士前理事長の軌跡：谷先生の実践されてきたのが正に医鍼薬の連携である。インド医学調査旅行をきっかけに鍼治療の魅力に気づかれ、その後ルーマニアのエイズ患者などにボランティアで東洋医学的治療として漢方薬と鍼灸の連携治療を施しておられた。保険診療（谷クリニック）と自由診療（長白会診療所）を、同じ階でも扉を違えて行われていた。鍼灸は自由診療の中で行われたり、近隣の鍼灸院で、気心が知れた赤羽先生の鍼灸院に紹介されたりしていた。

●医鍼薬地域連携の必要性と問題点

①どの鍼灸師が、何を得意にするか？に関する情報収集が必要。そのためにも医鍼薬地域連携研究会や病鍼連携協議会、統合医療ネットワークのような医鍼薬の交流活動が必要。

②紹介状は、谷先生のクリニックでは、メモ書きと漢方処方とで、鍼灸師が「以心伝心」で推定していた。紹介状の書き方は重要であるが、なかなか医師にも鍼灸師にも、紹介状の経費が無料の状況で、紹介状のために十分な時間を割くことが困難であるので、普段から気心を通じた連携を気づいておくことが必要では。

③小島鍼灸師からは、医師のものと同じようなカルテ記載などが理想ではあるが、東洋医学を理解していない医師に、東洋医学的用語を使わざるを得ない紹介状を書くには、用語を理解されないのが難しい。

④混合診療の危険性を避ける工夫

東銀座タカハシクリニックでの経験

吉祥寺中医クリニック長瀬先生（上馬場が代理で紹介）

浦田クリニック、ハタイクリニックの状況上馬場が紹介

⇒消炎鎮痛処置の一つとして鍼灸やアロマセラピーを10分間だけ行っている（浦田クリニック）。100点程度しか請求できないが、短時間なので収益性はある。また材料費や消毒経費などとして1か所500-1000円程度をいただいている（ハタイクリニック、吉祥寺中医クリニック）。判断が非常に困難な状況であるが、あくまで患者のための診療を心がければ、倫理的社会的に問題ないと思われる。

2) 北川先生

日本における美容鍼灸のリーダーとしてだけでなく、3年前から、大病院が経営母体となっている鍼灸教育機関、浜松医療学園の副校長としてのご意見をいただいた。

⇒鍼灸が、理学療法士や看護師などと同等の医療者として認識されていないため、病院への鍼灸師の就職が未だ少ない⇒鍼灸教育の吟味の必要性。医師の同意書なども取得が困難な状況を打破していく必要がある。病院において、鍼灸師の立場が認識されて、ばりばり活動できるようになれば、病院経営にも有利であるような鍼灸の活用法ができて、医鍼薬の連携が進むであろう。そのために、

① 具体的に、一つでも医鍼薬地域連携のモデルを作る。

② 適応疾患を確立するとよい。

1. 不妊症・逆子など産婦人科疾患：非薬物治療を患者が選択
2. 腰痛：85%の腰痛は精神的なものが関与し、整形外科的な疾患ではないとも言われている⇒鍼灸を活用できる。
3. 歯科疾患：鍼麻酔による無痛抜歯の経験を、原山次期東方医学会会頭からも報告があり、歯肉疾患が鍼治療で軽減しやすいことも歯学部によっては教育されているという（丹羽）。
4. 美容と健康増進：北川先生の御専門で、エビデンスも蓄積しつつある。養生鍼灸という概念の中で、鍼灸以外にも、食事や運動に関する知識を鍼灸師が有することが理想的である。そのためにも、鍼灸師が普段から学びを広めていくことが必要であろう。

③ 鍼灸治療のコストパフォーマンスを高める必要があろう。

北川先生は60分間の鍼灸治療をされているが、即効性の高い治療が鍼灸の特徴でもあるので、10-20分間で患者さんに満足させることができるような治療も必要ではなかろうか（上馬場）。鍼通電治療ならば10分間で効果がでる可能性がある。北川先生は火鍼などの強通法も活用されているという。

3) 丹羽先生

- ① コストパフォーマンスのよい鍼灸治療である YNSA を、咬合不正などの治療に頻用されている。
- ② 小島先生などの鍼灸師と密に連携し、気心のしれた鍼灸師による鍼灸治療を、患者さんに褒めちぎるくらい肯定しながら紹介する。
- ③ YNSA 学会の研究会などを通じて、歯科医師・医師と鍼灸師が交流している。また丹羽先生の歯科医院（橋本歯科）自体でも、数多くの統合医療関連のセミナーを開催されている（参加は自由）。

4) 荻野先生（福岡歯科）

咬合不全、下歯槽神経マヒの症例に、歯科と鍼灸の連携による統合治療を施している。現代医学で 60 回の星状神経節ブロックで効果がなかった症例が、鍼灸治療を加えることで 1, 2 か月で改善したという（別紙参照）

5) 今井亨先生

訪問診療において鍼灸と漢方に詳しい医師に同意書を書いてもらっている。しかし、同意書を書いてくれる医師は、1-2 割程度で、最近では、医師会からの同意書への反対などもあり、困難の状況にある。

最後に

一般財団法人東方医療振興財団では医師と針灸師、薬剤師が連携してよりよい医療を患者様へ提供できる仕組みを構築しようとしております。

東方医学は西洋医学の弱みを補完できる可能性を秘めています。しかしながら、患者様が適切な東方医学の治療を選べないのが現状です。そういった患者様へ、医師や薬剤師から、鍼灸師（東方医療）を紹介し、連携して医療を提供していく仕組みを作りたいと思っています。それは正に、東方医療振興財団の初代理事長間中嘉男先生、2 代目谷美智士先生がなされてきた診療形態だったのです。本日は、再来年（2019 年 2 月 3 日 ソラシティで開催予定）の東方医学会会頭の赤羽先生に、医鍼薬連携の問題点と解決策について提言していただき、その後 4 名以上の先生からご意見をいただきました。3 代目の理事長にあたる上馬場も間中先生には北里研究所附属東洋医学総合研究所にて 1 年間指導を受けた経験がありまして、何か因縁を感じております。今後、皆様のご協力を賜りたいと存じます。